

ル・アーヴル市中心街におけるオープンスペースの戦災復興による変化に関する研究

Study on the Changes of Open Spaces by the Post-War Reconstruction in the City Center of Le Havre in France

山口 諄也
YAMAGUCHI Junya

1. 序章

(1) 研究背景

フランス北西部大西洋岸に位置し、セーヌ川の航行促進による貿易機会創出・北方方面軍事拠点新設という2つの目的から、フランソワ 1 世の命令によって1517年に誕生した港湾都市ル・アーヴルは、軍港や貿易港を中心に、時代に応じて発展を遂げた。第二次世界大戦中ナチス・ドイツの占領下に置かれると、連合軍はドイツ軍の弱体化と港湾施設の奪還を目的として再三の爆撃を行った。8割以上が焦土と化し甚大な被害を受けた中心街は、フランス国内で重要な港湾機能を有する町として建築家オーギュスト・ペレ(Auguste Perret)を中心とした工房によって20年間の歳月をかけて再建された。

戦後の戦災復興計画が、都市計画と現代的な開発を統合する、先駆的かつ革新的な活用が実施された復興都市の傑出した例であるとして、2005年7月に世界遺産に登録された。世界遺産登録以降、ル・アーヴル市は、カジノやスケートパークの建設、開港500年記念イベントの実施やモニュメントの作成など、従来からの港湾関連産業に加えて、観光産業を市の主要施策として展開している。

世界遺産登録では、プレハブ工法の導入や鉄筋コンクリートの使用が革新的であった点、道路をグリッド状に通した点が評価され、オープンスペースについては十分に触れられていない。都市においては、公園や緑地などの都市施設は不可欠なものであり、19世紀中盤のオスマンによるパリ改造計画でも緑地計画が重要なものとして組み込まれていた¹⁾。実際、庁舎前広場の再建、中心部に位置する広場の拡張などから、復興においてオープンスペースの確保も企図されていたことが考えられる。一方、現在は港湾周辺に、日本庭園を含めてオープンスペースが新たに整備されており、ル・アーヴル市中心街においてオープンスペースも必要とされていることがうかがえる。オーギュスト・ペレによる再建計画前後のオ

ープンスペースの変容を把握し、ル・アーヴル市中心街の復興において、オープンスペースがどのように企図されていたか、改めて確認する必要がある。

ル・アーヴルに関しては、1780年代の港湾拡張²⁾と整備³⁾に関する研究やフランス国内におけるトラム整備による都市への影響を考察した研究⁴⁾や、再建された市中心街に関して、建築家オーギュスト・ペレらによって設計された教会の技術面での修復・保全の課題や住宅の設計に関する研究⁵⁾がある。

フランスにおける第二次世界大戦後の戦災復興計画に関して、政府による各都市の合理化された復興再建方針に関する研究⁶⁾などがなされている。

戦災復興におけるオープンスペースに関しては、東京戦災復興計画の緑地地域の指定過程に関する研究⁷⁾や同計画における復興都市計画緑地に関する研究⁸⁾、地方都市の戦災復興都市計画における広場計画と現況に関する研究⁹⁾がなされてきており、戦災復興におけるオープンスペースに関する日本国内の知見はあるものの、ル・アーヴルにおける同様の研究はなされていない。

(2) 研究目的

本研究は、時代に応じて変化を遂げてきた都市ル・アーヴルの、戦災からの復興計画の対象となった中心街を対象に、復興計画における住宅地再建の理念と、戦前・戦後・さらにその後現在に至るオープンスペースの特徴を、分布および周辺環境との関係など、対象地内での立地の変化から把握し、ル・アーヴルの戦災復興においてオープンスペースがどのように企図され、実際どのように役割が変化したかを考察することを目的とする。

(3) 研究方法

本研究では、オーギュスト・ペレが戦災復興でどのような街を作ろうとしたのかをみるため、復興計画概要とその決定に至るまでの経緯を文献調査から整理・把握した。続いて、戦前・戦後・現在の、対象地におけるオープンスペースの果たした役割の変

化をみるため、戦前から戦後および現在に至るまでのル・アーヴル市中心街のオープンスペースの特徴に関して、分布および周辺環境を、フランス国立図書館所蔵の古地図と航空写真、古写真やル・アーヴル市史などの文献から把握した。

(4)研究対象地

ル・アーヴル市は、フランス北西部、ノルマンディ地域圏、セーヌ＝マリティーム県に属し、首都パリから北西約 200km の場所に位置する港湾都市である。対象とするオープンスペースは、世界遺産登録範囲内の地図上で“Parc” “Place” “Square”（日本語で「公園」、「広場」）、と明記されているものや、個人宅の庭以外の、建物に覆われていない道路以外の空地とした。

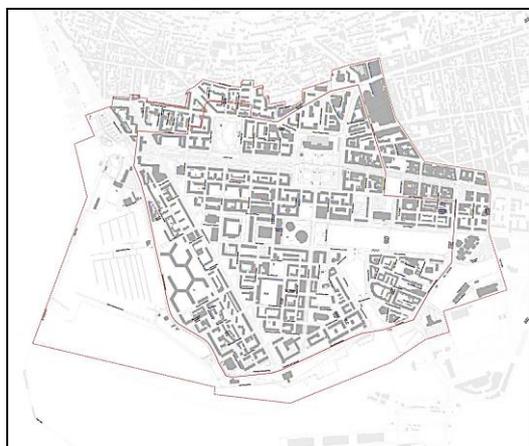


図 1 ル・アーヴル市中心街世界遺産登録範囲

(出典: UNESCO Nomination File 1181)

2. 対象地の概要

(1)ル・アーヴル市の成立と拡張過程

1517 年にフランソワ 1 世の命により新設されたル・アーヴル市では、1523 年に港の建設が完了した。開港理由は大きく、対イングランドやスコットランドの支援を目的とした軍事拠点となる港の整備が必要であったためと、セーヌ川を通行する船舶の航行環境の改善による貿易機会の促進するためとされた。

1541 年には、湿地や沼地であった港周辺の開発を進めるため、フランソワ 1 世がシエナの建築家ジョーラモ・ベラルマートに都市計画の立案を依頼し、従前地区と新規地区の整備を実施した。整備に当たって、一部地区の街路形状や幅に厳格な規定や家屋の高さ制限などが設定された。その後、16 世紀末のペストの流行と嵐の襲来による壊滅的状態からの回復を経て、17 世紀にはいると、海軍基地の拠点と貿易港としての地位が確立され、その後要塞機能および貿易機能が強化された。

人口は増加し、港の周辺に宅地が順次開発されていくと、人口過多が問題視されるようになった。これを受けて、1786 年に技師ラマンデ (François Laurent Lamandé) が計画した、貯水池の拡張および停泊地の拡大など、範囲は約 25000 m² に及ぶ大規模な港および都市の拡張計画が承認・実施された。

19 世紀には、西岸部にフラスカティ海水浴場やフランソワ 1 世大通りの整備、ガス灯の設置、下水道システムの整備など港湾以外の施設整備が進められた。この時期、近隣の村々との合併による人口が急増すると、要塞は取り壊され都市が拡大した。以降、第一次世界大戦までの間、ル・アーヴル港はフランスにおける貿易の拠点として黄金時代を築いた。

第二次世界大戦中は、1940 年のナチス・ドイツによる占領後、連合軍の爆撃により、死者 5,000 人、被災者 8 万人、15,000 の建物が破壊され、甚大な被害を受けた。終戦すると、ル・アーヴル港はフランスが奪還した。

16 世紀初頭の誕生から、軍港や漁港、貿易港として港湾の機能を変化させながら次第に発展を遂げ、ヴォーバンによる都市計画や 18 世紀中期のラマンデによる拡張計画に代表されるように、時代を経るごとに要塞型の都市を拡張していった。19 世紀中頃に都市壁を解体して市街地の面積を拡大、戦争の惨禍や周辺の他自治体との合併を経て、現在のル・アーヴル市の都市域が形成された。

(2)ル・アーヴル市戦災復興計画の概要と決定経緯

第二次世界大戦後の復興に際して、1944 年 11 月 16 日、復興都市計画省が、復興と都市計画を専門とし全国的な復興の方針や政策を決定する機関として設立され、現場での事業は各地方や自治体、工事組合に委ねられた。復興都市計画省は、1945 年に建築家オーギュスト・ペレを中心とする工房にル・アーヴル市中心街の再建を依頼した。当市は、戦時中の再三の爆撃により、フランス国内でも最も酷い被災都市の 1 つであったが、国内屈指の貿易港を抱え、復興に不可欠な都市として、重点的に早期復興するよう計画された。また、戦前の姿を再建するのではなく、新しく生まれ変わった都市を復興する、いわば“実験場”として計画が進められた。

計画の検討段階では、中心街の幹線道路の構成について、市議会とペレの工房との間で議論が行われた。1541 年に整備されたサン・フランソワ地区の街路や、都市の拡大に伴って 18 世紀に整備されたパリ

通り、19世紀に完成したストラスブール大通りは再整備することが合意されていた。一方で西岸と南岸を結ぶフランソワ1世大通りに対しては、戦前と同様に維持させたいと主張する市議会に対して、ペレはグリッド状の街路によって構成される区画を西岸部の端まで整備したいと主張していた。最終的には、市議会側の戦前の通し方を維持することが決定され、ペレの計画内において、フランソワ1世大通りは西岸と南岸を結んだままとなった。

(3)オーギュスト・ペレによる戦災復興計画とその思想

中心街の再建計画では、戦前からの主要な幹線道路である3本の通りが大きな軸として据えられた。東側の駅から市庁舎広場を貫き、西側の海岸までを結ぶストラスブール大通り市庁舎広場から南岸まで伸びるパリ通り、西には南岸からストラスブール大通りと西側で交差するように通るフランソワ1世大通りが維持された。

オーギュスト・ペレは、再建に際して以下のように計画を考えていた。

「通りの幅、建物の高さを変えたり、くぼみ、植栽された中庭、大小の正方形を作成したりすることで、その後の単調さを回避する。果てしない木の線は避けるが、木の枝、鏡、噴水のしぶきをどの角度からでも見られるようにする。」

このことから、グリッド状の単調な街路によって街並みが単調になることを危惧し、中庭の配置やそれに伴うくぼみによって変化を付与する意図があったと考えられる。

さらに、再建に際して、オーギュスト・ペレは8つの原則を策定した(表)。原則において、1)~4)と8)は道・街路、5)~7)は住居に関連していた。早期の中心街復興の効率と戦後の財政難や原材料の不足に起因する建設費のコスト削減、住宅密度の低減に重点が置かれていた。オープンスペースは、5)6)が関連しているが、住居建設における日照確保や眺望が優先されていたことがうかがえる。住居に関しては、まず周辺環境に関する原則が建築物の高さ規定に関する原則よりも上位に示されており、住居建設において日照確保や眺望が優先され、その手段として中庭(オープンスペース)が考えられていたといえる。早期かつ効率的な住居提供の実施が最優先事項とされる中、複数の建物とその間にある中庭の組合せをひとつの単位として展開させ、オープンスペースとして中庭を確保することを画策していたと考えられる。

表 再建計画に際して策定された8原則

(Techniques et Architecture N° 7-8,1946を元に筆者作成)

- 1) 主要街路と商業停泊地を基準に東西と南北で直交軸を形成する2つの軸は、「横糸」の基本となる。
- 2) 「横糸」は、100m四方のメッシュを形成する2つの直交する主要交通網から構成される。
- 3) 各メッシュは、二次交通網と更に交差する可能性がある。
- 4) 不可視の6.24mのフレームワークの「横糸」を基本として、街路線、幅員、街区と建物の寸法が決定される。これらは、音楽のリズムのように機能し、構造自体に適用すると、より標準化され、費用の節約につながる。
- 5) 道路に対して構築されるヴォリュームは、すべての住居に対して、最大限の日当たり、眺望、良好な自然光や、風向からの防護を保証しなければならない。
- 6) 同様の理由で、建物のファサードと建物のファサードの間に「中庭」と呼ばれる等しいスペースを維持することが望ましい。同じ街区内において、一般的な枠組みに従って調整された建物の中に、独立して自由に挿入される。
- 7) 建物の高さは、画一的にならず、5)や6)に関連し、それぞれの場所に応じて定義することが可能である。
- 8) 地下水面が0.8mと非常に地表に近いことを考慮して、道路網は嵩上げすることが望ましい。

また、復興された建築物の再建年代をみると、市庁舎広場とその周辺は、計画全体の中で早期に着手しており、復興再建のエリアと甚大な被害を免れた丘側との境界部として再整備することに重点が置かれていた。

(4)2005年世界遺産登録の概要と登録時の評価

2005年、第28回世界遺産委員会において『オーギュスト・ペレによって再建された都市ル・アーヴル』は世界遺産リストに記載された。

登録の際に評価された点は、下記の通りである。『都市は、鉄筋コンクリートを使用し、現代的に再建された。オーギュスト・ペレは、この組み合わせを「Classicisme Structurel」と呼び、本質的には柱と梁で構成され、厳格なモジュールは再建された街の建物と建物との空間など全体に広がった。それらは、建物の共同保有のような社会的実験、結果として共同体の文化的アイデンティティの創出をもたらした。伝統的な街の区画は、内部の中庭が形成されたことにより、以前よりも1haあたり2000人から800人へと人口密度を下げる効果が得られた。この計画では、通りや広場を再建する際の歴史的プロットを用い、破壊された都市の歴史的な軸や、16世紀の大聖堂や19世紀の裁判所、爆撃で生き残った埠頭や建物が保存されている。傑出した一貫性と優れた

構造をもつ再建された都市は、オスカー・ニーマイヤーの構造物やキャンディリスの集合住宅のような性質の異なるプロジェクトとも秩序と調和が保たれ、景観を損ねることのない例外的な例である。』

概して、中心街の早期復興に際し、現存する歴史的な街路を保存し、統一されたモジュールを用いた点、プレハブ工法によるシステムが採用され、短期での復興やコンクリート使用について革新的であった点が評価された。

3. 戦前のオープンスペースの役割

市庁舎広場周辺には財務・金融関係の施設が多く、市政の中核として機能し自治体関係者が集う場であった。また、野外ステージの設置などによって行われたコンサートの開催などからも、庁舎と一体的にル・アーヴル市の中心的存在であり、人々を集める役割を果たしていたと考えられる。

市庁舎広場の西側にはサン＝ロッシュ小公園が造成され、周辺は高級住宅街として開発が進んだ。ペストの流行時には、病院兼隔離施設(ラザレット)が園内に設置された。1783年より墓地として使用され、1849年に北側の丘にサン＝マリー墓地が完成するまでその機能を維持していた。以降、1868年の国際海事展の開催に際して、公共庭園の整備が進められ、水族館など誘客を目的とした新規の施設が設置された。周辺には老人ホームや寄宿学校などが所在し、高所得層や学生など幅広い世代の安らぎや憩いの場として、レクリエーション機能を有していた。サン＝ロッシュ小公園は、公共空地として、時代ごとに異なる要求を実現する役割を果たしていたといえる。

商業停泊地(内港)北側のジュール＝フェリー広場に隣接する商品取引所では、1882年から1912年にかけて、コーヒーと綿、羊毛などの先物市場が創設された。広場には取引商品があげられるなど、取引所とともに貿易拠点としての役割を有していた。周囲には、職業紹介所・各貿易相手国の領事館、たばこ工場・倉庫が停泊地を挟むように位置しており、内港周辺のオープンスペースは対外的な商業色や港との関わりがあったといえる。商業停泊地西側の、パリ通りを挟んで整備されたガンベッタ広場では、当市出身の著名人の銅像2体が建っていた。これらの銅像は、第一次世界大戦後に戦勝記念像に置き換えられることとなる。広場内西側には生花店が軒を連ね、街路樹の並木が整備され、広場の西端部の対面には劇場が整備されており、文化や象徴を示す場

としての役割が施されたといえる。内港南側には労働者が多く住んでおり、博物館などが整備された旧市場広場では、定期的に市場が開かれるなど住民の日常生活を営む場として役割が施された。

フランソワ1世大通りと並行して中心街を南北に走るレオン・プルヴェ通りは、サン＝ロッシュ小公園から南岸埠頭までをつないでおり、通り沿いには人々が集まる広場や公園が点在していた。北側から教会や中央市場に隣接、南下するにしたがって、広場の周辺には学校施設やコンサートホールが通り沿いに所在していた。これらは日常生活に緊密であり、オープンスペースは、日常生活や生業を営む場としての役割を有していたと考えられる。

市庁舎広場およびサン＝ロッシュ小公園以外の各オープンスペースは、中心街における立地ごとに異なる役割があったと考えられ、いずれも港湾との関係がみられた。



図2 戦前のル・アーヴル市中心街の概要
(1939年の航空写真に筆者加筆)

4. 戦災復興および復興後のオープンスペースの役割

戦災復興および戦災復興後の中心街における主要道路として、戦前と同様、市庁舎広場から真東にストラスブール大通り、同広場から西に走るフォッシュ通り(戦前の名称はストラスブール大通り)、市庁舎広場と南岸の埠頭を結ぶパリ通り、西岸のフォッシュ通り西端から南岸の埠頭までを結ぶフランソワ1世大通りが再整備された。商業停泊地(内港)も戦前と同様の場所に維持された。フォッシュ通りとパリ通りとフランソワ1世大通りの構成は「記念碑的な三角形」を形成した。「記念碑的な三角形」の内部の街路はペレの計画の基本であるグリッド状の街路が設

定されたことで、再建されなかった通りもあった。

市庁舎広場は戦災復興によって拡大し、世界遺産ビジターセンターの設置やトラムの設置から来訪者との交流拠点としての役割がもたらされ、戦争慰霊碑や記念碑の設置によって、記念性を示す場に変化した。サン・ロッシュ小公園は、遊歩道の整備や園内の緑化促進によって戦前同様に憩いの場としての役割を継承した。

パリ通りにまたがっていたガンベッタ広場は、ドゴール將軍広場へと名称を変更し、広場東側には爆撃を免れて残存した第一次世界大戦の戦勝記念碑が維持された。西側部分の爆撃で生じた更地には、1982年11月に建築家オスカー・ニーマイヤーによって劇場『Le Volcan』が建設され、2015年には図書館がオープンした。周辺には、戦前のパリ通りの街並み同様に来訪者向けのホテルやレストラン・カフェなどが立ち並んでいる。

戦前に、貿易拠点としての役割を有していたパリ通りより東側のジュール＝フェリー広場では、港の拡大と共に貿易拠点としての機能が失われ、旧商品取引所の商工会議所やカジノへの転換が行われ、経済活動を支える役割を継承した。

中心街の内側では、サン・ジョセフ教会前広場が信仰の場として機能を継承し、中央市場広場が戦前の市場の役割を維持した。一方、コミュニケーション広場やケネディ児童公園、アルベール・ルネ児童公園などは戦前および復興計画にはなく、計画完了後に新規に整備されたレクリエーション空間である。

また、復興計画通りに、中庭兼駐車場や屋上スペースなど、中心街に居住する住民のプライベートな、建造物に囲まれたオープンスペース（中庭）が創出した。これらは、一部に開口部が設けられ、街路に視覚的な変化をもたらしている。近年では、中心街南端部の旧埠頭を中心に緑地整備事業が展開され、市の誕生 500 年記念モニュメントの設置や子供向けの球技施設などが整備されるなど、レクリエーションや記念性を有する場が整備されている。

グリッド状の街路と幹線道路の構成からフランソワ 1 世大通り沿いに鋸歯状の余剰地が創出することとなった。これらのオープンスペースには、管理が比較的容易な芝生を敷設することで緑地の形成につながったと考えられる。



図3 再建後のル・アーヴル市中心街の概要
(2015年の航空写真に筆者加筆)

5. 結論

港湾都市として栄えていたル・アーヴルでは戦前、開放的なオープンスペースが、港湾周辺もしくは港湾と都市の中心部をつなぐ主要な道路上、政治の中心地や新興住宅地に整備され、市場やレクリエーション空間など、立地および周辺環境に応じて異なる多様な役割を果たしていた。

戦後の戦災復興においては、オーギュスト・ペレによって住居の供給と建て詰まり解消を目的に、グリッド状の効率性の高い計画が策定された。ペレは、住居の日照確保と眺望確保、単調になる都市景観に変化をもたらすために、閉じたオープンスペース（中庭）が整備されたと考えられる。一方、境界部の比較的規模の大きい開放的なオープンスペースは、復興により再建された。計画の策定過程では、新しい都市を作り出そうとするペレと、歴史性を残そうとする議会の対立によって、中心街内部と海の関係は希薄になり、ペレによる戦災復興は、中心街でのみ実現された。短期間で効率的なまちづくりは実現し、それが世界遺産登録において評価された。

戦前からある北西から南東に走るフランソワ 1 世大通りと、新たな東西南北に走るグリッド状の街路との関係から、鋸歯状の余剰地が出現した。これらは、計画検討時の市議会とペレの志向の相違から創出したといえる。現在、この余剰地には芝生がはられている。ペレの計画では、これらには言及しておらず、意図せずして単調な街路に視覚的な変化をもたらすというペレの計画思想が実現したといえる。

戦災復興完了後は、中庭など閉じたオープンスペースが維持されるなかで、中心街内や沿岸部に児童公園やウォーターパークなど新たなレクリエーション

ン空間の整備が実施された。

戦災復興は住宅の再建が中心であり、復興住宅においてオープンスペースは、住宅地に視覚的変化をもたらすために新たに整備される一方、境界部で戦前のレクリエーション機能などが再建されるなどのすみ分けが行われ、住宅地におけるオープンスペースの新たな役割が提示されたといえる。しかし復興後、住宅地にレクリエーション空間としてオープンスペースが整備されるのをみると、住宅地におけるオープンスペースは、視覚的変化をもたらす役割だけでは都市施設としては不十分だったといえる。



図4 戦災復興後の中心街におけるオープンスペースの全体像
(2015年の航空写真に筆者加筆)

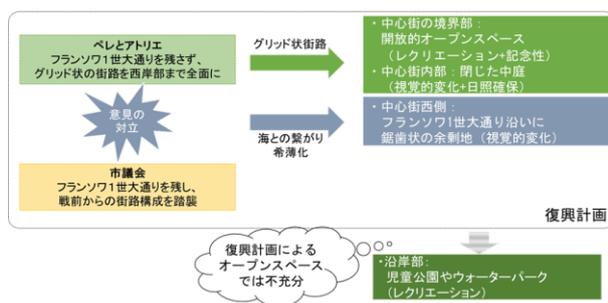


図5 ル・アーヴルにおける現在のオープンスペース形成過程

6. まとめ

以上、ル・アーヴルの復興においてベレは、住宅地の中心部に日照および眺望の確保と視覚的変化をもたらす役割に特化した閉じたオープンスペース、境界部にレクリエーションの場や記念碑としての役割に特化した開放的なオープンスペースを整備するという、新たな役割を提示したといえる。しかし、復興後、住宅地中心部に新たにレクリエーション空

間整備されているのをみると、復興時に施された役割だけでは不十分だったといえる。

昨今、市は中心街のノートル・ダム教会裏手のオープンスペースの整備事業やサン・フランソワ地区の教会前広場における歩行者空間の整備を検討している。内港周辺のオープンスペースと対象地北側の庁舎前およびサン=ロッシュ小公園といった記念碑的に残されたオープンスペースを核として、西岸部や南側の埠頭部との希薄化した関係から新たな関係を構築しうるオープンスペースのネットワークづくりを検討し、戦前から戦災復興を経て現代に至るル・アーヴルの港湾都市としての独自性を発現させる必要があると考える。

- 1) 佐々木邦博: オスマンのパリ改造計画における緑地計画の理念及びその実態について、「造園雑誌」51(5)、pp43-48、1987
- 2) 根岸美幸: 1780年代のル・アーヴル港拡張計画について、「土木史研究 講演集」29、pp267-270、2009
- 3) 根岸美幸: 1780年代のル・アーヴル港整備計画について、「土木史研究 論文集」29、pp93-99、2010
- 4) 塚本直幸、南聡一郎、吉川耕司、ペリー史子: フランスにおける都市交通政策の転換とトラムプロジェクト: ル・アーブル、オルレアン、トゥールを事例として、「大阪産業大学人間環境論集」14、pp57-102、2015
- 5) 伊藤香織、羽生修二: ル・アーヴルのサン・ジョセフ教会における保存・修復に関する研究、「日本建築学会関東支部研究報告集」81、pp611-614、2011
- 6) Bertrand Vayssière: Relever la France dans les après-guerres : reconstruction ou réaménagement? Guerres mondiales et conflits contemporains (No.236), pp 45-60, 2009
- 7) 宮本克己、戦災復興計画における緑地地域の指定に関する二、三の考察、「造園雑誌」56(5)、pp361-366、1993
- 8) 小田島啓太、土屋一彬、大黒俊哉、東京戦災復興計画の緑地計画における復興都市計画緑地に関する考察、「都市計画報告集」16、pp391-394、2018
- 9) 岩元俊輔、木方十根、鹿兒島県下・地方都市の戦災復興都市計画における広場の計画・実施とその現況、「都市計画論文集」44(3)、pp823-828、2009

主要参考文献

- Martine Liotard : Le Havre 1930-2006 la renaissance ou l'irruption du moderne, Éditions A. Et J.Picard, 2007.
- Région Normandie : LE HAVRE 1517-2017 La demeure urbaine, Éditions Lieux Dits, 2017
- Renée Grimard :,Un GRAND Week-end LE HAVRE er ses environs, hachette, 2017
- Félicien Carli : LE HAVRE PETITE HISTOIRE DE L'ARCHITECTURE, éditions du cardo, 2018
- ARCHIVES MUNICIPALES DU HAVRE : DICTIONNAIRE HISTORIQUE DES rues du Havre, Éditions des Falaises, 2011.
- UNESCO : Nomination file 1181, <https://whc.unesco.org/uploads/nominations/1181.pdf>, 20052)